

集英社文庫

女 も で

こ う よ う 群



集英社

 集英社文庫

でも ^{おんな}女

1997年 9 月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著 者 ^{むれ}群 よ う こ

発行者 小 島 民 雄

発行所 株式 集 英 社
会社
東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(3230) 6100 (編集)

電話 東京 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (制作)

印 刷 図書印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© Y.Mure 1997

Printed in Japan

ISBN4-08-748691-5 C0193

江苏工业学院图书馆

集英社文庫

藏書章 女

群 よ 7 正

古金一郎方



集英社版

目 次

姫だるま……………9

サンダルとハイヒール……………35

隣となりこじゆうと小姑……………61

キャンパスの掟……………87

忙中花ぼうちゆうか……………113

エンドレス・リング……………139

妖精のパンツ……………165

でも女……………193

ママチャリ部隊……………219

お茶の味……………243

解説——来生えつこ

で

も

女

姫
だ
る
ま

中学に入学したときは、小学校の延長みたいなものだからそうでもなかったが、高校に入るときは、物おじしない私もさすがに緊張した。今まで見かけたこともない、顔さえも知らなかった生徒が、九十パーセント以上になる。みんな最初は知らんぷりをしながら、「あいつ、意地悪そうだなあ」とか「あの人、かつこいい」とか「あの子は性格がよさそうだ」とか、私服なので、誰のファッション・センスがいいかとか、しっかりチェックしているのは間違いなかった。とにかく最初はお互いの腹のなかのざぐり合いから始まるのであった。

始業式の当日、クラス分けがあつて、そのときひとりひとりの自己紹介があつた。ひと目見て、

(おつ)

と思った男の子のいったことばだけは、しっかり覚えていたが、それ以外のことは全部忘れた。これで高校に通う楽しみができたと思っていたのに、クラスには手の早い女の子がいて、私がいいなと目をつけた男の子にじり寄り、

「ねえねえ、バレー部だったんだってね。私もそうだったの。高校でもバレーやるのん」

と甘えた声を出した。私は休み時間にあちこちで繰り広げられる、入学早々の男の子と女の子の下心がみえみえの接触を見て、

「あいつら、何であんなに盛りがっているんだ。何しに学校にきているんだ」

とぶつぶついつていた。しかしそうはいつても、だんだん悔しくなってきた、積極的な女の子たちが、私が目星をつけた男の子のまわりに集まっているのを見ると、横目でじつとにらみつけ、

（お前ら、ぜーったい、悪いことが起きるからな）

と念を送っていたのである。

男の子にはのつけからめぐまれそうになかったが、女の子にはめぐまれた。順子ちゃんと美恵子ちゃんである。順子ちゃん自分からはあまり喋^{しゃべ}らないし、愛想笑いもしないの^で、最初は怖い子かなあと思っていた。始業式の翌日、まだ自分の席はちゃんと決まっていなかった^{ので}、私は教室の後ろの出口にいちばん近い席に座っていた。すると背後に人の気配がする。いちばん後ろの席だから、私の後ろには誰もいないはずなのに、さっきから人のいる気配がするのだ。そつと振り返ってみたら、そこにぼーっと立っていたのが、順子ちゃんだったのである。

「どうしたの」

ときくと、彼女はすまなそうに、私のお尻のあたりを指しながら、

「そこ、私の席なんだけど」

といった。まだ席は決まっていなはずなのになあと思いつつも、彼女の思いつめたような目つきに圧倒されて、私は、

「あ、ごめんね」

といって席を立ち、いちばん前の空いていた席に移動した。そこは遅刻者が座る席だった。私は目の前で黒板を眺めながら、

（やっぱり変わった子だなあ）

と思った。しかしそうはいつでも、彼女が、

「ちよつと、どいてくれない」

といえないのをいいことに、平気で座り続けていたのは、やっぱりまずかったと反省し、休み時間に、

「さつきはごめんね」

とあやまりにいった。彼女のそばには、彼女とは反対に、にこにこ愛想のいい女の子が立っていた。

「うん、いいよ」

順子ちゃんもにこつと笑った。そこで私は順子ちゃんの隣でにこにこ笑っていた美恵子ちゃんと口をきいた。二人は中学校からの友だちではなく、きのう、下駄箱の前で上履きを間違えて履いて、知り合つたのだといった。

「私たち、おつちよこちよいだよねえ」

そこで初めて私と順子ちゃんと美恵子ちゃんは、お互いに、仲良くできそうだとピーンときて、それからいつもつるんで歩くようになったのだった。

私たち三人組は不得意な科目が見事に一致していた。文系はまだいいが、理系はからきしだめ。数学と聞くと頭が痛くなり、物理と聞くと失神しそうになった。体育もかつたるいから嫌い。私と順子ちゃんは音楽を選択し、美恵子ちゃんは美術を選択した。ただそれだけが違っていた。やりたいこととやりたくないことが、不思議なくらい同じだったのだ。夏のプールでの水泳の授業も、絶対、水着姿にはなりたくない私たちは、体育の担当教師が若い男性で深く追及しないのいいことに、生理だと嘘をついていつも見学していた。二週間に一度、必ず三人揃って平気な顔で生理のふりをしていた。それに気がついた女の子が、

「そんなに休んでいると、単位がもらえないよ」

と心配してくれたこともあったが、私たちは、

「そんなの知らない。単位を落とすよりも、水着になるほうがずっと恥ずかしいよ」

と取り合わなかった。授業中は体力を温存しておいて、学校の帰りに近くの団子屋に寄って、パワーを爆発させた。勉強はせずエッチな話をし、とにかく放課後のことだけを考えて、毎日を送っていたのである。

二学期も始まったある日、私たち三人組がいつものようにきやつきやつと騒いでいると、ふつとそばに寄ってきた影があった。何げなく影のほうに目をやると、そこには大きな体を縮めて、はにかみながら立っている、昭代ちゃんの姿があった。彼女は顔がとても小さくて、アイドル系のかわいい顔をしていた。ところが残念ながら体がでかかった。身長百六十九センチの洋梨みたいな体型で、おとなしい。たとえば体にふさわしいでかい顔がついていたら、それなりに存在感はあるが、体とはアンバランスの顔をしていたために、クラスでの存在感は薄かった。おまけに性格もしゃべりじゃないので、いつも体を縮めているような感じがあったのだ。

「どうしたの」

私たちが声をかけると、彼女はほつとうれしそうな顔をして、

「同じ中学校から来たんでしょ。いいわねえ」

といった。二学期になったというのに、そんなとぼけたことをいう奴なんかない。

「違うよ、私たち、ここで初めて会ったんだよ」

「ふーん、いいな」

彼女は中学のときにとっても仲のいい友だちがいたが、別の高校にいつてしまった。同じ中学からきた子もいないし、だから高校に入ってから、仲のいい友だちがいないのだといつて、悲しそうな顔をした。

「ふーん」

自分からしやしやり出ていかない彼女は、友だちもないのに、学校に通っていた。私たちは授業はどうでもよくて、ただ友だちに会うためだけに学校にきているといつてもよかった。彼女は何となく私たちと一緒にいたいような素振りをみせたので、

「これから一緒に昼御飯を食べようよ」

「そうだよ、そうすればいいよ」

と口々にいった。すると彼女は心からうれしそうに、

「本当にいいの」

と笑った。

「いいよ、そんなに遠慮することないよ」

そしてそれから三人組だった私たちは、四人組となって、つるんで歩くことになったの